中仙道域方言の記述的研究

―― 信州の三地点について ――

江　端　義　夫

○ はじめに

一　目　的

本稿で私は，中仙道のうち，信州の三地点を選び，それらの方言を対象とした記述的研究をおこなう。

これは，日本語方言成立史研究における中部地方方言の内質の探究をめざすものの一つである。

二　資　料

1974年（昭和49年）4月18日から4月24日までの一週間，私は，長野県木曽郡山口村字馬籠，長野県木曽郡楢川村字贄川，長野県小県郡和田村字上和田で方言調査をおこなった。

本稿では，この三地点を調査して得られた資料だけを活用する。

三　対象地概況

馬籠は長野県と岐阜県との接境の丘陵地にある。北方に海抜801*m*の馬籠峠がある。かつては，木曽路11宿の南端に位置する宿場町であった。

贄川は1197*m*の鳥居峠の北にあり，木曽路の北の入口にあたる集落である。

上和田は1531*m*の和田峠を北東に越えた山間にあり，農業集落である。

三地点ともに「峠」を間近にひかえた中仙道交通の要所である。

四　記述の方法

発音・文法・語彙という三つの観点で，以下の記述的研究をおこなう。

発音については，文アクセント傾向・文アクセント・語アクセントに関して，三地点での比較研究をおこなう。

文法については，「文表現の諸相」を見る。ついで「文構造の二相」（敬語法と文末詞法）について，その体系と機能とを考察する。

語彙については，人称代名詞語彙をとりあげて，三地点での比較研究をおこなう。

1　発　音

一　文アクセント傾向

――文末卓昇アクセント傾向について――

文表現全一体に認められる高低の音声波を文アクセントと言う。方言文アクセント波形の一定のまとまりが認められた時，そこに文アクセント傾向を帰納することができる。

馬籠の土地人は，日常の話しことばの文末に，卓立高昇の抑揚波を見せる。これを私は文末卓昇アクセント傾向とする。その抑揚波形を⌒で表記し，以下に実例をあげる。

○コーシンズカノ　オバーガ　ナクナッター。
庚申塚のお婆が亡くなったね。（老女）

○イー　コトダト　オモットルー。　今の世はいいことだと思っていますよ。（老女）

○モドルマイト　オモッテ　オモットル。　昔の幸せは，もう戻るまいと思っているわ。（老女→私）

○ヘンピナ　ノーソンガ　ナクナルカト　ユーサカイメダ　ミ。　いまは辺鄙な農村がなくなるかどうかという境めだね。（老男）

○ウチノ　オババニ　アワナンダ　カイン。　うちのお婆に会わなかったかね。（老男）

○ソレ　イガイ　ミン　ミー。　それ以外見ないね。（老男）

○イックラ　クルカ　シレン　ミ。　どのくらいの旅客が見に来るかしれないほどだね。（老女→私）

○キネンドーカラ　イエワ　サムシー　ミ。　藤村記念堂から上の家並はさみしいものだよ。（老女→私）

○モー　ワロソロ　ヨズ　ヨー。　もう，じき来るだろうよ。きっと。（中男）

○ミンナ　トラナイ　ヨー。　どこへ行っても私からは入場料をとらないわよ。（老女）

○オラワ　ソー　モー　イ。　私はそう思うわ。

（老女→私）

○イハイガ　チャント　イレタッタ。　位牌がちゃんと入れてあったよ。（老男）

以上の実例から，文末卓昇アクセント傾向について次のことが言える。

（イ）文末卓昇アクセントの卓昇の音程は，おおむね完全五度以上である。「ナクナッター」における「ター」は，「ナッ」よりも完全五度以上卓昇する。

（ロ）この文アクセント傾向は男女を問わず行なわれている。

（ハ）この文アクセント傾向は，文末詞「ニ」「ヨ」が見られる文表現の末尾に，繁くあらわれる。

（ニ）この文アクセント傾向は，話し手の心情が表露された文に見られやすい。

（ホ）この文アクセント傾向は，馬籠方言に見られる。贄川や上和田のには見られない。

二　文アクセント

文アクセント研究には二途がある。一つは土地人同士の自由会話の中から資料を求めて研究を行なうものである。他の一つは，体系をなす文例を準備し，土地人にそれを発音してもらって得た資料に基づいて，研究を行なうものである。この章では，私は後者によって行なう。

私は，語アクセントと密接な関連を持たせ，文アクセント体系を認出せしめ得べき56文例を準備した。それを土地人に発音していただいた。

文アクセントおよび語アクセント調査に協力してくださった方々は，次のとおりである。

馬籠…大脇利右衛門（65才），勝岡ふくえ（67才）

贄川…森川基雄（59才），深沢富代（52才）

上和田…工藤悌（86才），伊藤かなめ（49才）

三地点の文アクセントについて，その異同を見る。馬籠のをあげ，贄川・上和田のがそれと相異する場合は，（　　）でその旨を注記する。

①ハヤク　オキル。

②カイコオ　アツメル。

③ウシト　アソブ。

④ボールオ　ケル。ボールオ　ケル。

⑤コーリガ　トケル。

⑥ユガ　ワク。

⑦ハチガ　サク。

⑧マドオ　アケル。

⑨ミドリガ　ウツクシー。ミドリガ　ウツクシー。（贄川・上和田ではミドリガ　ウツクシー。）

⑩テオ　タタク。

⑪ウタオ　キク。

⑫オトガ　タカイ。

⑬ツルベオ　ツクル。（上和田ではツルベオ　ツクル。）

⑭ハジメガ　タイセツダ。（贄川ではハジメガ　タイセツダとが併存。）

⑮ヒガ　シズム。

⑯フロニ　ハイル。（贄川ではフロニ　ハイルとが併存。上和田ではフロニ　ハイルとが併存。）

⑰カジニ　オドロク。

⑱ヒオ　ケス。

⑲カガ　トブ。

⑳ホガ　ミエル。

㉑セガ　ヒクイ。（贄川ではセーガ　ヒクイとが併存。上和田ではセガ　ヒクイとが併存。）

㉒ラナガ　オヨグ。

㉓カレイオ　クー。（贄川ではカレイオ　クー。上和田ではカレーオ　クーとが併存。）

㉔フタツガ　ヨイ。

㉕アキガ　クル。

㉖マツガ　オオイ。（上和田ではマツガ　オオイとが併存。）

㉗イネガ　ミノル。（上和田ではイネガ　ミノルとが併存。）

㉘モミジガ　イロズク。

㉙フユガ　クル。

㉚クモガ　ヒクイ。

㉛ハオ　キル。

㉜コムギオ　マク。コムギオ　マク。（贄川・上和田ではコムギオ　マク。）

㉝コニ　シタガウ。（贄川ではコニ　シタガウ。コニ　シタガウ。上和田ではコニ　シタガウとが併存。）

㉞アメワ　アマイ。アメワ　アマイ。（贄川・上和田ではアメワ　アマイ。）

㉟ツミオ　ユルス。

㊱ココロワ　カナシー。

㊲ウラミガ　ナイ。

㊳イキガ　ナガイ。（上和田ではイキガ　ナガイとが併存。）

㊴チカラガ　ツヨイ。（贄川ではチカラガ　ツヨイ。上和田ではチカラガ　ツヨイ。）

㊵コブシオ　ニギル。（贄川・上和田ではコブシオ　ニギル。コブシオ　ニギル。）

㊶タライデ　アラウ。（上和田ではタライデ　アラウとが併存。）

㊷キズガ　イタム。

㊸チガ　デル。

㊹ナミダガ　ウカブ。（贄川ではナミダガ　ウカ

ブとが併存。）

㊺イナカワ　トオイ。（贄川ではイナカワ　トオイとが併存。）

㊻クスリオ　ウル。

㊼セナカガ　カユイ。

㊽クシオ　サガス。（贄川・上和田ではクシオサガスとが併存。）

㊾ケガ　ウスイ。ケガ　ウスイ。（贄川ではケガウスイ。）

㊿アタマガ　ヨイ。

(51)ホンオ　ヨム。

(52)モンジオ　カク。

(53)エニ　アラワス。

(54)マコトオ　ツクス。

(55)イノチワ　トートイ。

(56)ココロガ　ワカイ。

以上を通観して，三地点における文アクセントの型の異同をまとめれば次のとおりである。斜線は型の対立を示す。百分率は型の異同の出現率である。

ⓐ馬籠・贄川・上和田で共通の型のもの……66%

ⓑ馬籠／贄川・上和田…… 9%

ⓒ馬籠・贄川／上和田…… 9%

ⓓ馬籠・上和田／贄川…… 7%

ⓔ馬籠／贄川／上和田…… 9%

この結果，馬籠と贄川と上和田とが，共通の文アクセント型を見せがちであることがわかる。したがって，文アクセント体系は，三地点とも同質である。

三　語アクセント

文アクセントを導くために用意した56文例中から，主要単語81を選択した。三地点での語アクセントの状況は，以下のとおりである。

馬籠の語アクセントを記し，贄川・上和田のが馬籠のと相異するばあいは，（　）でその旨を注記する。

エ（絵），ハ（葉），ユ（湯），ヒ（火），ヒ（日）チ（血），ケ（毛），カ（蚊），ホ（帆），ウシ（牛）アメ（飴），キズ（傷），ウタ（歌），オト（音），フユ（冬），クシ（櫛），ハナ（花），クモ（雲），イネ（稲），イキ（息），マツ（松），アキ（秋），フナ（鮒），マド（窓），ハジメ，イナカ，コオリ，フタツ（上和田ではフタツとフタツとが併存。），ツルベ，ミドリ，チカラ（贄川・上和田ではチカラ。），コムギ・コムギ（贄川・上和田ではコムギ。），モミジ，アタマ，ウラミ，コブシ（贄川・上和田ではコブシ。），ナミダ，カレイ・カレイ（贄川ではカレイ。上和田ではカレイとカレイとが併存），イノチ，ココロ，セナカ，マコト，タライ，クスリ，カイコ，キク（聞く），サク（咲く），トブ（飛ぶ），ウル（売る），ケス（消す），キル（切る），カク（書く）（贄川ではカクとカクとが併存。），ケル（蹴る），クー（食う），ヨム（読む），ニギル，シズム，ウカブ，アソブ，オキル，トケル，タタク，ユルス，ハイル，カナシム（贄川・上和田ではカナシム。），シタガウ，アツメル，アラワス，オドロク，ナイ，ヨイ，アマイ，トオイ，ウスイ，タカイ，ヒクイ，オオイ（上和田ではオオイとオオイとが併存。），ワカイ，カナシー，スズシー，トオトイ

以上の語アクセントの発音事実から，文アクセントにおいてと同様に，語アクセントの大部分が，三地点共通の型を見せることがわかる。ただし，顕著な相違点を指摘すれば，次のとおりである。

馬籠／贄川・上和田……チカラ／チカラ，
コムギ・コムギ／コムギ，
コブシ／コブシ，
カレイ・カレイ／カレイ，
カナシム／カナシム

個別的な三，四音節語のアクセントに，型の対立があるのが注目される。

かくして，語アクセントと文アクセントと文アクセント傾向とについて，次のように言いまとめることができる。

①馬籠・贄川・上和田の語アクセントと文アクセントとは，大略，同質である。

②馬籠の文末卓昇文アクセント傾向は，贄川・上和田のに見られない特異なものである。

③馬籠の語アクセントは，贄川・上和田のと異なり，語類にかかわりなく，特定の三・四音節語について，一定の明白な型の対立がある。

④特定の三・四音節語で，贄川・上和田の語アクセントと型の対立を示した馬籠の語アクセントは，文アクセント傾向へ影響を及ぼしえていない。

Ⅱ　文　法

文法は文表現法である。私どもの言語生活は，文表現を運用する生活である。

以下の記述は二つに分かれる。一つは，「文表現の諸相」である。他の一つは，「文構造の二相」である。両者は，本来，表裏一体の文表現統一体である。

一　文表現の諸相

1.　「人家訪問の挨拶とそれへの応答」

馬籠

対等へのもの言い。

●イー　アンバイダ　ワイシ。　いい天気だね。

↓

○アー。イー　アンバイダ　ワイシ。　ああ。いい天気だね。

※○⇄○の記号は，○→○の発言とそれへの応答○←○とを併記したものである。以下同じ。

下⇄上へのもの言い。

○ヤーネ。オル　カイン。　姉さん。いますか。
⇅
○アーイン。オル　ヨー。　はい。いるよ。

○イー　アンバイダ　ナーシ。　いい天気ですね。
⇅
○オー。オ下シ　カー。　おお。おとしか。

上⇄下へのもの言い。

○オル　カヨー。　いるかい。
⇅
○アーイン。オル　ゾイン。　はい。いますよ。

贄川

対等へ，または上⇄下へのもの言い。

○イタ　カネー。　居たかね。
⇅
○ハーイ。イルン　ネー。　はい。居ますよ。

○オーイ。イル　カネー。　おおい。居るかね。
⇅
○アー。オルオル。　ああ。居るよ。

○ヤイ。イタ　カヤイ。　やい。居たか。
⇅
○アー。オルオル。　ああ居るよ。

下⇄上へのていねいなもの言い。

○オリマス　カ。　居ますか。
○コンニチワー。　こんにちは。
○コンバンワ。　こんばんは。
○オツカレサマ。　おつかれさま。

上和田

下⇄上への，ていねいな朝方のもの言い。

○オハヨー　ゴワス。　お早うございます。
⇅
○オハヨー　ゴワス。　お早うございます。

その他，時刻に応じたもの言い。

○イル　カイ。　いるかい。<日中。ぞんざい>
○コンバンワ。　こんばんは。<夕方>
○オツカレー。　おつかれさま。<夕方。最近の言いかた>

2.「人家辞去の挨拶とそれへの応答」

馬籠

下⇄上へのもの言い。

○オヤスミナンショ。　お休みなさいませ。
⇅
○オー。オヤスミ。　おお。お休み。

○オヤスミナンショ。　お休みなさいませ。
⇅
○アイン。オヤスミ。　あい。お休み。

対等へのもの言い。

○マタ　クル　ワイ。　また来るわね。
○ゴッツォーデ　ゴザイマシタ。　ごちそうさまでした。

訪問先では，たいてい，お茶のもてなしがある。そこで，つぎの慣用的なもの言いがさかえている。

○ゴッツォーサマ。　ごちそうさま。
⇅
○アイン。オソソダッタ　ノイン。　はい。お粗末でしたねえ。

○ゴッツォーデ　ゴザイマシタ。　ごちそうさまでした。
⇅
○アイン。オソソダッタ　ノイン。　はい。お粗末でしたね。

贄川

下→上へのていねいなもの言い。

○オシマイナンシ。　おしまいなさいませ。
○ジャー　オヤスミナ。　ではお休みなさい。

文末部の「ナンシ」が，馬籠での「ナンショ」と照応し，注目される。

対等へのもの言い。

○ゴチソーサマ。　ごちそうさま。

上和田

下→上へのていねいなもの言い。

○オシマダレ　カケテ　モーシワケ　ゴワセン。
おてまをおかけして，申しわけございません。

対等へのもの言い。

○ゴチソーニ　ナリヤシタ。　ごちそうになりました。

ぞんざいなもの言い。

○サイナ。　さようなら。
○オヤスミ。お休み。<夜に辞去のばあい>

3.「感謝の挨拶」

馬籠

感謝の挨拶の一般的なもの言い。

○アリガトー。　ありがとう。

具体的な情況に応じてのもの言い。

○スマーン　ノーイ。　すみませんねえ。
○ゴッツォーサマ。　ごちそうさま。

贄川

下→上へのていねいなもの言い。

○ワルイ　ネー。アリガトー　ゴザイマス。　わるいね。ありがとうございます。
○スミマセン　ネ。　すみませんね。

対等へのもの言い。

○アーレ　ワルイ　ネー。　あれ，わるいわね。
○ワルイ　ワヤー。　わるいなあ。

詫びの表現が感謝の表現となるのは，馬籠でのばあいと同じである。

上和田

下→上へ，対等へのていねいなもの言い。

○アリガトー　ゴワス。　ありがとうございます。
○ゴチソーサンデス。　ごちそうさまです。

4.「朝の挨拶」

馬籠

日常の，普通ないしはぞんざいなもの言い。

○ハヤイ　ノイ。　早いねえ。
○ハヤイ　ノーイ。　早いですね。
下→上へのていねいなもの言い。
○オハヨー　ゴザイマス。

贊川

下→上への特別ていねいなもの言い。
○オハヨー　ゴザイマス。イー　アンバイデ　ゴザイマス。　お早うございます。いい天気でございます。
下→上へのていねいなもの言い。
○オハヨー　ゴザイマス。　お早うございます。
対等へのもの言い。
○キョー　バカニ　ハヤク　オキタジャ　ナイカ。　今日は，ひどく早く起きたね。
○ケサ　バカニ　ハヤイジャ　ナイ　カ。　今朝は，ひどく早いじゃないか。
上→下へのぞんざいなもの言い。
○オハヨー。　お早う。

上和田

これは，朝方の人家訪問の挨拶のと同じである。
対等へ，または上→下へのもの言い。
○ハヤイ　ナーヤイ。　早いねえ。

5.　「説明の表現」

むこうから「先生が来た。」ということを聞き手に説明する言いかたが，問題とされる。

馬籠

○センセーガ　キテ　クレタ　ヨ。　先生が来て下さったよ。<もっともていねい>
○センセーガ　ミエタ。　先生が来られた。<ていねい>
○センセーガ　キタ。　先生が来た。<普通・ぞんざい>
「先生がゴザッタ。」とか「先生がオイデタ。」という言いかたは少ない。

贊川

○センセーガ　ミエタ。　先生が来られた。<ていねい>
○センセーガ　キタ。　先生が来た。<普通・ぞんざい>
馬籠・贊川の「ミエタ」と「キタ」との待遇関係は，よく似ている。

上和田

○センセーガ　オイデタ。　先生が来られた。<普通・ていねい>
○センセーガ　キタ。　先生が来た。<ぞんざい>
上和田のには，「オイデタ」があり，「ミエタ」が見られない。

6.　「まあ，おあがりなさい」……勧誘の表現

馬籠

○アガッテ　クンナンショ。　あがって下さいませ。<もっともていねい>
○アガラッセレ。　おあがりなさい。<ていねい>
○マー　アガランショ。　まあ，あがりなさいよ。<普通>
○マー　アガレ　ヨ。　まあ，あがれよ。<ぞんざい>

贊川

○オアガリナンショ。　おあがりなさいませ。<ていねい>
○オアガリナスッテ。　おあがりなさって。<普通>
○サー　アガリマショ。　さあ，あがりましょう。<普通>
○サー　オアガリ。　さあ，おあがり。<ぞんざい>

上和田

○オアガリナスッテ。　おあがりなさって。<ていねい>
○サー　アガッテ　キナスッテ。　さあ，あがって来なさって。<ていねい>
○アガレ　ヤー。　あがれよ。<普通・ぞんざい>
上和田のには，「〜ナンショ」が見られない。「〜ナスッテ」は，上和田のに著しく，また贊川のにもあるが，馬籠のには聞かれない。

7.　「どうぞお願い申します」……願望の表現

馬籠

○ドーカ　オタノモーシマス。　どうぞお頼み申します。<ていねい>
○タノム　ゾイン。　頼みますよ。<普通>
○ソーニジャ　タノム　ゾ。　それでは頼むぞ。<ぞんざい>

贊川

○オネガイシマス。　お願いします。<ていねい>
○コレ　タノム　ワ。　これ，頼むね。<普通・ぞんざい>

上和田

○ヨロシク　オネガイ　モーシヤス。　よろしくお願い申しあげます。<ていねい>
○オネガイ　シヤス。　お願いします。<普通>
馬籠のと贊川のとが「〜マス」丁寧法であるところを，上和田のは，「〜ヤス」丁寧法にしている。

8.　「あれを見よ」……命令の表現

馬籠

○コレオ　ミテ　クンナンショ。　これを見て下

さいませ。<ていねい>

○アソコ　ミサッセレ。　あそこを，ご覧なさい。<ていねい>

○アレオ　ミランショ。　あれを見なさい。<普通・ていねい>

○アソコ　ミョ。　あそこを見ろ。<ぞんざい>

贊川

○アレ　ミマショ。　あれを見ましょう。<ていねい>

○アレ　ミテミ。　あれを見てみな。<普通>

贊川では，「〜マショ」が注目される。

上和田

○ゴランナスッテ。　ご覧なさって。<ていねい>

○コレ　ミレ　ヤ。　これを見ろよ。<普通>

○ミテ　ミロ。　見てみろ。<普通・ぞんざい>

見るの命令形に，「ミレ」と「ミロ」と両形があるのが注目される。馬籠では「ミョ」である。

9.「この手紙を読んで下さい」……依頼の表現

馬籠

○ヨンデ　ミテ　クンナンショ。　読んでみて下さいませ。<ていねい>

○コノ　テガミオ　ヨンデ　クレ　ヤー。　この手紙を読んでくれよね。<普通>

○コノ　テガミオ　ヨンデ　クリョ　ヨ。　この手紙を読んでくれよ。<ぞんざい>

「クンナンショ」の最上敬語が注目される。

贊川

○ヨンデ　クダサイ。　読んで下さい。<ていねい>

○ヨンドクレ　ヤ。　読んでおくれよ。<普通>

○ヨンドクレ。　読んでくれ。<普通・ぞんざい>

音訛を除けば，これらは共通語的である。

上和田

○テガミ　ヨンデ　オクンナスッテ。　手紙を読んでおくれなさい。<ていねい>

○ヨンデ　ミテ　クンネー。　読んでみて下さい。<普通>

馬籠での「クンナンショ」と，上和田での「オクンナスッテ」とを比較するとき，表現の西部日本的気風と東部日本的気風との差が，識得される。

以上，若干の共通質問項目による対照記述の考察を通して，三地点での文表現の諸相を見てきた。その結果，つぎの二点が帰納された。

㋑馬籠の文表現は，比較的，贊川のに近く，上和田のに遠い。

㋺贊川のは，上和田のと馬籠のとの方言特性を，兼備しがちである。

二　文構造の二相

統一体としての文の構造を，私は，敬語法と文末詞法との二つの観点でとらえる。いま，ここで言う敬語法とは，待遇表現を仕立てる特定動詞・助動詞によってなされる訴え形式をさしている。また文末詞法とは文末詞によってなされる訴え形式をさしている。

その1.　敬語法

馬籠・贊川・上和田の三地点の方言において，狭義の敬語法を醸成せしめる特定動詞，助動詞について記述する。

馬籠

当該事象の小体系は，つぎのとおりである。

尊敬法――○オイデル　○ゴザル　○〜セル　○〜サッセル　○〜ンショ　○ミエル

謙譲法――○クンナンショ　○クダサイ　○モース

丁寧法――○〜デス　○〜マス　○ゴザイマス

馬籠の敬語法の特性をよくあらわすものとして，私は，つぎの4事象をあげる。すなわちそれらは，「〜ンショ」「〜セル」「〜サッセル」「クンナンショ」である。

ⓐ「〜ンショ」

○オマエ　イカンショ。　あなたさま，お行きなさい。（使用人→主人へ）

○ミンナ　モッテカンショ。　全部，持ってお帰りなさいよ。（老女→壮男）

○オマエ　ヤランシ　ヤ。　あなたがおやりなさいよ。（老男→私）

これらの実例は，馬籠での上等の敬意を表わす。対称の代名詞「オマエ」（御前）は，敬語であり，原義を保っている。

ⓑ「〜セル」

○モー　イッパイ　ノマッセレ。　もう一杯，お酒をお飲みなさい。（老女→客）

○キオラッセル。　こちらへ来られる。（中男）

○ドコエ　シマワシタ。　どこへおしまいなさったの？（中女→中男）

一段活用と変格活用との動詞につづく時は，「〜セル」が「〜サッセル」となる。

ⓒ「〜サッセル」

○モー　イッパイ　タベサッセレ。　もう一杯，お食べなさいよ。（客人に食事を勧める言いかた）

○コサッセレ。　おいでなさいな。

「〜セル」「〜サッセル」は「〜シャル」「〜サッシャル」と同系統のものである。

ⓓ「クンナンショ」

○ハヨー　オキテ　クンナンショ。　早く起きて

くださいよ。

○コレオ　ミテ　クンナンショ。　これ（畑の雑草）を見てくださいよ。

つぎに，贄川の敬語法の小体系を記す。

贄川

尊敬法――○オイデル　○ゴザル　○ミエル　○〜ナンショ　○〜ナンシ　○〜ナスッテ　○〜ナシテ（タ）

謙譲法――○オクンナンショ　○オクレ　○クンナ　○クダサイ　○チョーダイ　○オモライシタ

丁寧法――○〜デス　○〜マス　○〜マショ　○ゴザイマス　○ゴザンス

贄川の敬語法は，馬籠のよりも豊富である。馬籠で見られなかった事象がここにある。その中で，私は以下の4事象について記述をおこなう。

ⓐ「〜ナシテ（タ）」

○サー　オアガリナシテ。　さあ，おあがりなさいませ。

○ゴランナシタ　カ。　ご覧になられましたか。（老女→私）

これは，共通語の「ナサル」の系統に属するものであろう。品位は高い。

ⓑ「オモライシタ」

○トコロノ　オイナリサマエ　イッテ　ミテ　オモライシタダ　ワネ。　当地のお稲荷様へ行って，伺っていただいたんですよ。（老女→私）

○センセーニ　オシエテ　オモライシタ。　先生に教えていただいた。（老女→私）

ⓒ「〜マショ」

○イッテ　キマショ。　行っておいでなさいませ。（老男→中男）

おおむね「〜マショ」であり，長呼しない。

○ホイジャ　ソッチノ　イチマンエン　ヨコシトキマショ。　それでは，そっちにある一万円をお戻しなさい。（老女→老男）

○キーテ　ミマショ。　聞いてみなさい。（老男→私）

「マス」の未来形で，命令形の代用をさせている。

ⓓ「ゴザンス」

○エロー　ゴザンシタ　ワネ。　辛うございましたわ。（老女→私）

○イマノ　ヨーニ　ヨカー　ゴザンセンシ　ノイ。　今のように体がよくはございませんしね。（老女→中男）

○アンキ　シロッテ　コトデ　ゴザンシタ。　安心しろということでございました。（老女→中男）

「ゴザンス」は，言うまでもなく，「ございます」「ございました」がつづまってできたものである。ていねいなもの言いとして，さかんに使用されている。

つぎに，上和田の敬語法の小体系をあげる。

上和田

尊敬法――○オイデル　○〜ナンシ　○〜ナステ　○オ〜ナ　○〜ナイ

謙譲法――○オクンナイ　○クンナ　○クロ（クイ・クリヤ・クリャ）　○クダサイ

丁寧法――○〜デス　○〜マス　○ゴザイマス　○ゴワス　○〜ヤス

上和田には，贄川で見られた敬語事象のうちのいくらかが見られない。たとえば，「〜ナンショ」「ミエル」「ゴザル」などの尊敬語を，私はこのたびの調査の範囲では聞きえていない。使用頻度が低いからだろう。また，謙譲語の「オクンナンショ」「オモライシタ」や，丁寧語の「〜マショ」「ゴザンス」も，上和田の土地人には慣じみの薄いものだろうと考えられる。

さて，私は上和田で特に注目されるものとして，次の3事象，「〜ナイ」「〜ゴワス」「〜ヤス」をとりあげる。

ⓐ「〜ナイ」

○オラチノ　トコエ　ヨリナイ　ヤー。　私の家へ立ち寄りなさいよ。（老女→中男）

○アガリナイ。　居間へあがりなさい。（老男→私）

○オチャ　オアンナイ。　お茶をおあがりなさい。（老女→中男）

「〜ナイ」は盛んに用いられている。これは「〜なさい」の縮約形であろうか。

ⓑ「ゴワス」

○オハヨー　ゴワシタ。　おはようございました。

○オツカレデ　ゴワス。　お疲れでございましょう。

○オハルカデ　ゴワス。　久しぶりでございます。

○アリガトー　ゴワシタ。　ありがとうございました。

これは，挨拶に多く見られがちである。古老の男性のもの言いに，これが今もなお残っている。

ⓒ「〜ヤス」

○カモンサンガ　オトーリニ　ナリヤシタ。　掃部司さんが中仙道をお通りになりました。（老男→私）

○ココニワ　アリヤシテ　ナー。　ここには有りましてね。（老男）

○ヨー　シミヤス　ナー。　よく冷えますねえ。

○ヨク　オイデヤシタ　ナー。　遠方からよくおいでましたねえ。（中女→私）

○ドコエ　イッテ　キヤシタ。　どこへ行って来られましたか。

「〜ヤス」は「〜マス」とほぼ同じ意味作用をもつ。これは，馬籠や贄川には見られない。近畿的とも言える「〜ヤス」が上和田にさかえているのが注目される。

その2　文末詞法

日本語は，文末で文表現の最後的な意味を決定させる。思いを文末に託す。それゆえ，各地の方言社会には，文末詞に各方言社会独自の着想の妙が見られる。深く広い方言の世界の一頂面を，私どもは文末詞法に認めうるのである。

さて，馬籠と贄川と上和田とにおける文末詞の体系を記し，各々の体系内で，他と比較して特色を示す若干の文末詞事象について記述する。

馬籠

(1)ナ行音文末詞類——ⓐ「ナ」「ナー」「カナ」「カナー」「ワナ」「ワナー」　ⓑ「ニ」「ニー」　ⓒ「ネ」「ネー」「ノネ」「ヨネ」「モンネー」「ワネー」　ⓓ「ノ」「ノイ」「ワノイ」「カノ」

(2)ヤ行音文末詞類——ⓐ「ヨ」「ヨー」「ノヨ」「カヨ」

(3)サ行音ザ行音文末詞類——ⓐ「サ」「サー」　ⓑ「ゾ」「ゾー」「ゾイ」「ゾン」

(4)「カ」文末詞類——ⓐ「カ」「カー」「カイ」「カイー」

(5)助動詞系転成文末詞——ⓐ「ダ」「ダー」

(6)名詞系転成文末詞——ⓐ「モノ」「モン」

(7)代名詞系転成文末詞——ⓐ「ワ」「ワー」

(8)感動詞系転成文末詞——ⓐ「ナーシ」「ナモ」「エモ」

馬籠では，呼びかけの文末詞に「ノイ」，述定の文末詞に「ニ」が多用される。また，「ゾイ」がよく聞かれ，岐阜・尾張に盛んな「ナモシ」系の文末詞「ナーシ」が注目される。

ここで，文末詞「ノイ」・「ニ」・「ゾイ」の機能を見る。

「ノイ」

○ニギワシー　ワノイ。　にぎやかだよねえ。（老女→私）

○ツガ　ヨク　ナッテ　ノイ。　交通の便がよくなってね。（老女→私）

○ソンナ　コタ　ナカナカ　デキン　シコーダノイ。　そういうことは，なかなかできない趣向だよねえ。（老女→私）

○イエネ。ソンナ　コトワ　セン　ノイ。　いいえ。そういうことはしないのよ。（老女→私）

「ノイ」の「イ」は"イとギの中間の音"だと土地人は説明する。「ノイ」の発音を聞けば，馬籠の人か否かがすぐに判るとも付言した。「ノイ」は [noĩ] であろう。この鼻音化が，よく文表現全体の訴え効果を高めている。

「ニ」

○ダメダ　ニー。　だめだよ。（老女→幼男）

○ヨー　アルカン　ニ。　まだ歩くことができないね。（老男→私）

○ミチノ　クロノ　シューワ　コマル　ニ。　道路端に田畑のある衆は，作物が荒されるから困るだろうな。（老女→私）

○ノーギョーワ　レジャーダ　ニ。　今では，農業はレジャーだね。（老男→私）

「ニ」は，判断や表出の文表現の文末へ自在に添加し，きりっと品よく文を結着させる。

「ゾイ」

○ムカシャー　シゴト　セスト　オモッテモ　ナカッタ　ゾイ。　昔は仕事をしようと思っても，賃仕事がなかったよ。（老女→私）

○ソンナ　ニスイ　モント　チガウ　ゾイ。　そんな愚鈍なものではないよ。（老男→私）

○サムシー　ゾイ。　淋しいもんだよ。（老女→私）

「ゾイ」は話者の主体的な立場を表明する。「ニ」と互換しうる意味をもつ。主体者の瞬間的な総合判断によって，「ゾイ」と「ニ」とのどちらかが選択される。

馬籠の方言で，一つ，文末詞における／i／音好みの趣向を指摘することができよう。

贄川

(1)ナ行音文末詞類——ⓐ「ナ」「ナー」「ワナ」「ワナー」　ⓑ「ニ」「ニー」「ダニ」　ⓒ「ネ」「ネー」「ヨネ」「ヨネー」「セネ」「セネー」「カネ」「カネー」「ワネ」　ⓓ「ノ」「ノイ」

(2)ヤ行音文末詞類——ⓐ「ヤ」「ゾヤイ」「カヤイ」　ⓑ「ヨ」「ヨー」

(3)サ行音ザ行音文末詞類——ⓐ「サ」「サー」　ⓑ「ジ」「ジー」　ⓒ「セ」「セー」「ゼ」「ゼー」　ⓓ「ゾ」「ゾー」（「ド」「ドー」）

(4)「カ」文末詞類——ⓐ「カ」「カー」「カイ」　ⓑ「ケ」

(5)助動詞系転成文末詞——ⓐ「ダ」「ダー」

(6)名詞系転成文末詞——ⓐ「モノ」「モン」

(7)代名詞系転成文末詞——ⓐ「ワ」「ワー」「ワイ」

(8)感動詞系文末詞――ⓐ「ナンシ」「ノイシ」

贄川には，馬籠でさかんな「ゾイ」が見られなかった。「ニ」もその勢力は弱く，「ノイ」もさほどにさかえてはいない。しかし，「ネー」や「ナー」がよくおこなわれ，特異な「ジー」「セー」が見られる。贄川にも，馬籠と同様に「ナモシ」系統の「ナンシ」「ノモシ」が残存する。ここで，贄川の特色ある文末詞「ジー」「セー」をとりあげる。

「ジー」

○ソンナ　コタ　ネーッテ　イッタ　ジー。　そんなことはないって言ったよ。（老男→中男）

○シュッカスル　ヨーダ　ジ。　出荷するようだね。（老男→中男）

○ソンナ　コタ　ネー　ジ。　そんなことはあるはずがないよ。（老男→老男）

この「ジ」は，判叙文の末尾に来やすいか。日上に対するもの言いには，概して少ない。

さて，「ジー」に似たものに「セー」がある。「セー」の方がより丁寧であり親愛がこめられている。

「セー」

○モーシアゲタ　セー。　申しあげましたよ。（中男→恩師）

○ソー　セ。　そうよ。（老男→中男）

○ベンリワ　ヨク　ナッタ　セー。　便利は良くなったね。（老男→中男）

○キキタイ　モンデ　セ。　聞いてみたいもんだよ。（老男→中男）

○ハサミテーケド　ハサマネー　ワケ　セ。　はさみたいけれどもはさまないわけだね。（老男→中男）

この「セー」は「ジー」と用法が似ている。「セー」の方が，いくぶん敬意がこもっていると見られる。

上和田

(1)ナ行音文末詞類――ⓐ「ナ」「ナー」「ワナ」「ワナー」　ⓑ「ニ」「ダニ」　ⓒ「ネ」「ネー」「ヤネ」「ヨネ」「ワネ」　ⓓ「ノ」

(2)ヤ行音文末詞類――ⓐ「ヤ」「ヤー」「カヤ」　ⓑ「ヨ」

(3)サ行音ザ行音文末詞類――ⓐ「サ」「サー」　ⓑ「セ」「セー」（「デ」「デー」）　ⓒ「ゾ」「ゾー」

(4)「カ」文末詞類――ⓐ「カ」「カイ」

(5)助動詞系転成文末詞――ⓐ「ダ」「ダー」

(6)名詞系転成文末詞――ⓐ「モノ」「モン」

(7)代名詞系転成文末詞――ⓐ「ワ」「ワー」「ワイ」

私は，上和田の文末詞の特色として，助動詞系転成文末詞「ダ」をとりあげる。つぎに「ダ」ことばのさかんな言語生活の一端を記す。

「ダ」

○ドコ　イッタ　ダー。　どこへ行ったの？（幼女→私）

○ナン　シテタ　ダー。　何をしていたのか？（幼女→私）

○エマ　ワズカノ　トコニ　キテル　ダー。　今，貫通まぎわのところまで来ているよ。（老男→私）

「ダ」ことばのさかんさは，次の文例のように，「だめなんだ」とあるべきところを「だめダんだ」と言ってしまう事態にも，明らかにうかがわれる。

○ノイテ　スグ　エレッカラ　ダメダン　ダ。　歯を抜いてすぐ入れるからだめなんだ。

もっとも，贄川でも，上和田ほどではないが，助動詞系転成文末詞「ダ」がさかえている。

上和田の文末詞は，いわゆる方言的特色が稀薄である。すなわち，それは共通語のに近い様相を呈している。たとえば上和田の文末詞には，馬籠・贄川のに比べて，「ナモシ」系文末詞が見られないこと，三地点に共有される「ニ」の使用が顕著でないこと，また，贄川の「ジー」がもはやここには見られないことなどが指摘される。「セー」が少しくおこなわれ，贄川との連関を物語ってはいる。

文末詞の全体を通観してみるに，馬籠と贄川とは文末詞の体系の類似が上和田のよりもつよい。上和田のは，より共通語的であると言えよう。

Ⅱ　語　彙

方言社会にはみな，独自の語彙生活がある。語彙生活の中で，もっとも一般的に使用される語彙分野を，「生活一般語彙」とよぶ。以下で問題とする「人称代名詞語彙」は，「生活一般語彙」の一分野である。

一　一人称代名詞語彙

三地点について，人称代名詞語彙の記述をおこなう。

馬籠

(1)自称

「オラ」　中老年の男女に最もふつうに使われる。

「オラヤター」　オラの複数形。私たち。

「オレ」　オラと同じ。オラよりもまれ。日常一般の自称。

「オイ」　オレの音訛によるもの。

「ワタシ」　中年青年の女子によく使われる。

「ワシ」　一般的なもの。

(2)対称

「オマエサマ」　最上等のもの。

「オマエ」　上等・対等へのもの。頻用される。

「ワレ」　目下へのもの。よく用いられる。
「ワイラー」　おまえたち。
(3)他称
実際，その人の名前や愛称を言うことが多い。彼，彼女というのは聞かない。
(4)不定称
「ドンナ　ヒト」　ふつう一般のもの。
「ダレ」　ふつう一般のもの。
「ダーレ」　話中では長呼されやすい。

賛川

(1)自称
「オラ」　年寄にふつうに使われる中品位のもの。
「オレ」　男子によく使われる。
「ワシ」　オラに比べて女子によく使われる。
「ワシラ」　ワシの複数形，または単数形。
「ワタシ」　とくに少女によく使われるいいことば。
「アタシ」　ワタシよりもはるかによく使われる。
(2)対称
「アンサン」　対等または対等以上へのもの言い。あらたまった時に使われる。
「アンチャン」　敬意のこもったもの。年上の人へは誰にでもこのように使われる。
「オマエ」　オメーよりもていねい。目上へ使われる。あまり使われない。
「オメー」　日常よく用いられる男女共用のもの。
(3)他称
「アンラー」　アンニーの複数形。
(4)不定称
「ダレ」　ふつう一般のもの。

上和田

(1)自称
「オラ」　老男女に，よく使われる。
「オレ」　オラの転訛形。
「ワシ」　オラと同様，よく使われる。
「ワシドモ」　自称の複数形は，きまって「〜ドモ」と言う。
(2)対称
「アンター」　気づかいな者への呼称。
「オメーサン」　日常よく使われる。
「オメー」　土地人の日常のもの。
「アチャ」　目下へのもの。あまり聞かれない。
(3)他称
「アノヤロー」　男のもの言い。品位は低い。
「コノヤロー」　男のもの言い。品位は低い。
「オトコショー」　よく使われる。シュがショとなる。
「オンナショー」　よく使われる。シュがショとなる。
(4)不定称
これについては記すべきほどのことがない。

以上，三地点の人称代名詞語彙を記述した。個別の語詞には，三地点それぞれに独自なものがある。ここに，人称代名詞を用いる語彙生活の実相が注目される。

○おわりに

本研究で私は，中仙道のうち，信州の峠直下の三地点を選んだ。それらの方言についての記述研究をおこなった。その結果，以下のことが明らかになった。

一　発音については，馬籠のが，賛川や上和田のに見られない文末卓昇アクセントを示し，3・4音節語のアクセントに一定の差異を示す。

二　文法については，馬籠のは賛川のと類似し，上和田のと対立する。上和田の文表現の諸相・敬語法・文末詞法は，他に比して共通語的性質が強い。

三　人称代名詞については，総じて三地点とも，個別性が注目される。

中仙道方言の実態は複雑である。中仙道域方言・東海道域方言・北陸道域方言と，いわゆる"糸魚川ー浜名湖方言境界線"とをＸＹ軸に見たてた中部方言の研究を，さらに深めてゆきたいと考えている。

私は，中部地方の方言研究を，恩師藤原与一先生の懇切なるお導きに従って進めてきました。本稿もまた，先生の御学問の恩恵に負うところ甚大であります。記して心からお礼申しあげます。

方言をご教示くださった馬籠・賛川・上和田の方々の純粋なご厚意を心から感謝申しあげます。

1974. 9. 10

A Descriptive Study on the Dialect of the Nakasendō Area

Yoshio Ebata

In this paper I make it my chief aim to describe the dialects of the three localities, Magome, Niekawa, Kamiwada which are parts of Shinshū in the Nakasendō Area.

The results obtained are as follows:

1) In the phonetic field

In Magome I recognized the inclination of the sentence-end-rising intonation and the distinctive features of the pitch accent of the three or four words, which were not found out in other parts.

2) In the grammatical field

Only in Kamiwada I recognized well the common language character in the various expressions, the honorifix, and the sentence-final particles.

3) In the field of vocabulary

The vocabulary of the personal pronoun seemed to be, on the whole, characteristic in the three localities.

In future, I will promote the study of the dialect of the Chūbu District in detail comparing the dialect of the Nakasendō Area, Tōkaidō Area, Hokurikudō Area with that of so called dialectal Borderline Area of the Itoigawa-Hamanako.